

【 宮城県気仙沼市の方言概観 】

ここでは、今回の会話集に現れた特徴を中心に、伝統的な気仙沼市方言の音声や文法を概観していきます。

Ⅰ 音 声

【子音】

▼カ・タ行の有声化

語中・語尾にあるカ・タ行の音が有声化し、ガ・ダ行になる。

☞これは簡単に言えば、単語の頭以外の位置にあるカ・タ行の音が濁音のガ・ダ行になり、濁って聞こえることです。専門的に言えば、母音に挟まれた無声子音/k/t/が有声子音/g/d/になることで、有声化と呼びます。単語の頭にあるカ・タ行は普通は有声化しません（下の例で言えば「柿」は「ガギ」にはなりません）。

例) カ行→ガ行 (/k/→/g/) : 開ける → アゲル、柿 → カギ
 タ行→ダ行 (/t/→/d/) : 旗 → ハダ、 的 → マド

この特徴は、今回の会話集の話者たちにもかなりよく保たれているようです。例えば、カ行音については、「オモイガラ」（重いから）、「サギ」（先）、「イップグ」（一服）、「ヨーダゲ」（用だけ）、「ワルイゴド」（悪いこと）、また、タ行音については、「イダ」（居た）、「コンニズワ」（今日は）、「アセ カイデダ」（汗かいてた）、「アドデ」（後で）、といった例が聞かれます。

ただし、完全にガ行やダ行に濁るのではなく、共通語の発音よりはやや濁っているといった程度の発音も多く聞かれます。それら軽度の有声化音も、文字化資料ではガ行・ダ行の文字で表示してあります。

▼ガ・ダ・ザ・バ行の鼻音化

語中・語尾にあるガ・ダ・ザ・バ行の音が鼻音化する。

☞単語の頭以外の位置にあるカ行がガ行になることによって、「開ける」はアゲルとなり、「上げる」と混同してしまいそうです。しかし、「上げる」のほうは「げ」が鼻濁音、すなわち鼻にかかった濁音（「ヶ°」のように半濁点で表記する）となり、

「開ける」＝アゲル

「上げる」＝アケ°ル

で両者の混同は起こりません。このように、「げ」が鼻にかかる現象を鼻音化と言います。

今回の会話集の話者たちもこの特徴を持っています。例えば、「ヤスメナカ°ラ」(休めながら)、「トーリスキ°レバ」(通り過ぎれば)、「イソク°」(急ぐ)、「オガケ°サマ」(おかげさま)、「スコ°ド」(仕事)のような発音が聞かれました。ただし、鼻にかかっているのかいないのか微妙で、聞き取りの難しいケースも多かったです。そうした問題を含むものの、文字化資料では一律に鼻濁音で表記してあります。

以上のガ行に加えて、同じようにダ・ザ・バ行も鼻音化します(ここでは「ンダ・ンゼ・ンビ」のように上付きのンで表記します)。

例) ダ行：肌 → ハンダ
ザ行：風 → カンゼ
バ行：首 → クンビ

以前は、気仙沼市でもこうした発音が行われていたものと思われていますが、現在は衰微が著しく、今回の話者たちからはほとんど聞かれませんでした。

▼キ(キャ行)の口蓋化

キが「チ」に近く発音される。また、キャ、キユ、キヨも「チャ、チュ、チョ」と似たように発音される。

☞これは「口蓋化」と呼ばれる現象の一種です。この場合の口蓋化とは、キの発音をするときに、舌の前の部分が上あご(硬口蓋)に接近する現象を指します。

例) 機械(きかい) → チカイ
救急車(きゅうきゅうしゃ) → チューチューシャ
今日(きょう) → チョー

上の例では、「チ」と表記しましたが、気仙沼では完全にチになるのではなく、キのあとにシの発音を添えるような微妙な音になることが多いようです。今回の会話集の話者たちにもこの特徴は見られ、「ヤルチ」(やる気)のような例が聞かれます。しかし、概してこの傾向は強くは現れていません。

【母音】

▼イとエの統合

イとエが同じ発音となる。

☞母音単独で発音されるイとエは区別されず、ともにエに近い音になります。

例) 息 (いき)、駅 (えき) → 両方ともエギ
鯉 (こい)、声 (こえ) → 両方ともコエ

今回の会話集の話者たちからも、「エカ° レネー」(行かれない)、「エレレバ」(入れれば)、「エラレナガッタ」(居られなかった)などの例が聞かれます。ただし、この特徴も弱まってきており、イとエが似たような発音になるものの、完全に同じではなく、一応区別はするという状態になりつつあるようです。

▼シとス、ジとズ、チとツなどの中舌化

イ段音とウ段音が近い音となる。

☞イの音がウの音に近づく現象(またはその逆も)を「中舌化」(ちゅうぜつか、なかじたか)と言います。宮城県ではイ段音とウ段音でこの中舌化が起き、ニとヌ、ミとム、リとルなどが互いに近い音になります。これらは一応の区別がありますが、シとスに関しては両方とも「ス」、ジとズは両方とも「ズ」、チとツは両方とも「ツ」のように発音され、これらは区別がありません。いわゆるズーズー弁と呼ばれる所以です。

例) 獅子 (しし)、煤 (すす)、寿司 (すし) → すべてスス
知事 (ちじ)、地図 (ちず)、辻 (つじ) → すべてツズ

今回の会話集の話者たちからも、「スコス」(少し)、「センエンスカ」(千円しか)、「ツカ° ウ」(違う)、「マイニズ」(毎日)、「ダイズナシャスン」(大事な写真)などの発音が聞かれました。

ただし、現在ではこの中舌化の特徴も弱まりつつあり、シとス、ジとズ、チとツが、似た発音ではあるものの一応の区別はなされている、という段階に入りつつあります。共通語とあまり変わらない発音が聞かれることも多くなっています。

㉑ アクセント

気仙沼市のアクセントは、宮城県中・南部の無型アクセントとは異なり、アクセントの型をもつ有型アクセントである。

☞例えば「橋」と「箸」を声に出したときに、有型アクセントの地域ではハとシの音の高低が決まっています（＝型が有る）、それによって単語の区別が付きませんが、無型アクセント地域では高低が決まっていない（＝型が無い）ため、区別されません。

低い発音を細い文字、高い発音を太い文字で表すと、気仙沼市の場合、「橋」と「箸」は、単語のみ発音したときには両方とも、[ハシ] ないし [ハ^シ] のような似た発音になりますが、助詞をつけて「橋が」「箸が」と発音すると、「橋が」の方は [ハシガ〜ハ^シガ]、「箸が」の方は [ハ^シガ] のようになり、区別が現れます。

高年層においては、共通語の [ハシガ] のように単語の頭が高い発音はあまり聞かれませんが、ただし、世代が下るにつれ共通語化が進み、若い世代では、そうした単語の頭が高いアクセントも聞かれるようになってきています。

㉒ 文 法

【格助詞】

▼「が」「を」の不使用

共通語の「が」「を」にあたる格助詞を使わないことが多い。

☞共通語の「が」のような主語を表す助詞や、「を」のような目的語を表す助詞が用いられず、以下のように無助詞で表示されることがよく見られます。特に、「を」にあたる助詞に顕著です。

例) 主語 : 俺 行く (俺が行く)

目的語 : 酒 飲む (酒を飲む)

今回の会話集の話者たちからも、「ス Copp イガッタガモ」(ス Copp がよかったかも)、「ダイズナシャスン ハイッテッカラ」(大事な写真が入っているから)、「ス Copp コワスチマッタ」(ス Copp を壊してしまった)、「コイズ カリテイッカラ」(これを借りて行くから) などのように、「が」や「を」を使わない発話が聞かれました。

▼「サ」

共通語の「へ」「に」に当たる格助詞に「サ」がある。

☞「サ」は共通語の「へ」よりも意味が広く、「に」に重なるところも多くあります。

- 例) ドゴサ イク° ノー (どこへ行くの)
ビョーインサ イッテ (病院へ行って)
エサ カエッデキデ (家に帰ってきて)
カタズゲサ キタカラ (片付けに来たから)
ココサ トマッテタ (ここに泊まっていた)

ただし、「サ」は共通語の「に」ほど広い意味をもっているわけではありません。微妙なのは存在の場所を表す用法であり、今回の会話集でも、「シズカ° ワサ イルノデ」(志津川に居るので)のように「サ」を使った発話例が聞かれる一方、「ソゴニ アッカラ」(そこにあるから)のように「サ」を使わず「ニ」を用いた発話例もあります。気仙沼市では、もともと「～サ 居る」「～サ ある」という言い方はしませんでした。が、しだいに、そのような言い方をするようになってきたものと考えられます。

【副助詞】

▼「サケア」

共通語の「さえ」にあたる副助詞として「サケア」が使われる。

- 例) ジモトニイテサケア ヤンネアノニ (地元に住てさえやらないのに)
アツササゲア トーリスキ° レバ (暑ささえ通り過ぎれば)

【接続助詞】

▼「ガラ」

共通語の「から」に当たる接続助詞(順接既定条件)に「ガラ」がある。

☞「ガラ」の用法は共通語の「から」とほぼ同じと思われます。共通語同様、次のように、終助詞的に使用されることもあります。

- 例) ツナミ コネアガラネ (津波は来ないからね)
クエナエワゲデ ナイガラネ (食えないわけではないからね)
エレレバ イード オモッデッガラネ (入れればいいと思っているからね)

▼「ケント（モ）」

共通語の「けれど（も）」に当たる接続助詞（逆接既定条件）に「ケント（モ）」がある。

☞「ケント（モ）」のほかに、「ケンド（モ）」「ゲント（モ）」といった濁音の加わった形も使用されます。

例) カリニ キタンダケントモ カシテケンネバガネスー。(借りに来たんだけれども、貸してくれませんかねえ)
マズイケンド クエナエワゲデナイガラネ(まずいけれど、食えないわけではないからね)

☞「カラ」と同様、終助詞的に使用されることも多いようです。

例) コネガラ アンシンシテッケントー(来ないから安心しているけれど)
アナホリ シテタンダケントモッサー(穴掘りをしていたんだけれどもね)

☞「ケ」という語が使われることもあります。共通語の「のに」にあたる感じです。

例) キノーマデ ゲンキデ イダッケー、チョーシ ワルイッテ、ダイジョーブダイガ。
(昨日まで元気でいたのに、調子悪いって、大丈夫だろうか)

【接続詞】

▼「ンダガラ」「タ（ッ）ケ」「ンデ」「ンダゲッド」

共通語の「だから」にあたる「ンダガラ」、「そしたら」にあたる「タ（ッ）ケ」、「それでは」にあたる「ンデ」、「だけど」にあたる「ンダゲッド」などが用いられる。

例) ンダガラ モッテガレネーンダイヤ(だから、持って行かれないんだよ)
タケ ソンナゴド アンノスカッテ イッタテネ(そしたら、そんなことあるのですかって、言ったってさ)
ンデ ビョーインサ イッテ ミデモライッスぺ(それでは、病院へ行って見てもらいましょう)
ンダゲッド ツゴー ワルイガラッテ(だけど、都合が悪いからって)

☞今回の会話集には現れていませんが、「ンダガラ（ホンダガラ、ダガラ）」は、単独で相づちのようにも使われ、相手の言ったことへの強い同意・共感を表す用法もあります。

例) ー今日、暑イゴド (今日は暑いね)
ーンダガラ ((本当に) そうだね)

【助動詞】

▼「べ」

共通語の「～だろう」(推量) や「～しよう」(意志) に相当する助動詞に「べ」がある。

☞「べ」は<推量><意志>のほかにも<確認><勧誘>などがあり、その用法は多岐にわたります。また、「取る、起きる、来る」など「る」で終わる動詞に接続するときは「る」が「ッ」となる促音便が生じ、それぞれ「トッペ、オギッペ、クッペ」のようになります。

例) 明日、雨だべ。(明日雨だろう) <推量>
明日は早く起きッペ。(明日は早く起きよう) <意志>
お祭り、お前も行くべ? (お祭り、お前も行くだろう?) <確認>
みんなでがんばッペ。(みんなでがんばろう) <勧誘>

今回の会話集では、「オモイヤリモ タンネンデネベガ」(思いやりも足りないのではないだろうか)、「コイッテ イーベガネッスー」(これっていいでしょうかねえ)などのように「～ベガ」の形で相手に確認をとる用法が見られます。また、「ナンダベ カオイロー アンマリ ヨグ ネーネー」(何だろう、顔色があまりよくないね)、「オライデモ コイズスカネーノニ、ナゾスッペ」(私の家でもこれしかないのに、どうしよう)などのように、「ナンダベ」「ナゾスッペ」の形で感動詞風に使う発話も聞かれます。

【終助詞】

▼「チャ」

共通語の「だろ」「じゃない(か)」「よね」などにあたる終助詞として「チャ」が用いられる。

☞相手が知っているはずだ、当然わかるはずだ、と思う事柄を示し、相手に確認させる機能があります。今回の会話集では、次のような例が聞かれます。この場合、「何で歩かないの?」といった非難の感情が込められています。

例) アルケバイーッチャ (歩けばいいじゃないか)

▼「ダイガ」

共通語の「だろうか」にあたる終助詞として「ダイガ」が使用される。

例) ダイジョーブダイガ (大丈夫だろうか)

ガマンカ° タリナインダイガネー (我慢が足りないんだろうかねえ)

☞今回の会話集には「ダイヤ」という終助詞も登場します。こちらは「ダイガ」とは違って、共通語の「だよ」にあたるもので、強く断定する気持ちが込められていると思われる。

例) モッテカ° レネーダイヤ (持って行かれないんだよ)

▼「オンネ」

共通語の「もんね」にあたる終助詞として「オンネ」が用いられる。

例) カエッテコレネガッタオンネ (帰って来られなかったもんね)

ンダオンネー (そうだもんねー)

▼「ネス」

丁寧にもちかける終助詞として「ネス」が使用される。

例) カシテケンネベガネス (貸してくれませんかねえ)

コイッテ イーベガネッスー (これっていいでしょうかねえ)

【敬語】

▼「ス」「ガス」「ゴザリス」「ハリス」「(ラ)イン」

敬意を表す形式として「ス」「ガス」「ゴザリス」「ハリス」「(ラ)イン」などがある。

☞共通語との対応を考えると、大まかに言って、「ス」は「です」「ます」、「ガス」は「です」、「ゴザリス」は「ございます」、「ハリス」は「なさいます」などにあたります。「(ラ)イン」は相手に丁寧に働きかける言い方で、柔らかい印象を与えます。

例) ブッサンイチカ° アッカラ イカ° ネッスカ。(物産市があるから行きませんか)

ハイハイ ワガリシター (はいはい、わかりました)

オヒル タベダノスカー (お昼食べたのですか)

ソノホ イーガストー (その方がいいですよ)
ソノタンビ チカ° ウガスト (その度に違うんですよ)

ゴクローサンデゴザリス (ご苦労さまでございます)
アリカ° ドゴザリシタ (ありがとうございました)

カラダ ヤスメナガラ ヤラハリセー (体を休めながらおやりなさいませ)
ユックリ ヤスマハリセー (ゆっくりおやすみなさいませ)

オジャッコ ノマイン (お茶を飲んでください)
ソゴサ オイテッテケライン (そこに置いて行ってください)

▼「ダイ(ン)」

共通語の「いらっしゃい」にあたる言い方として、「ダイ(ン)」を用いる。

例) ダイッテ イワレダンネ (いらっしゃいって言われたのね)
イッテダイン (行ってらっしゃい)

☞お客を送り出す挨拶言葉として、気仙沼市では「マタダイン」(またいらっしゃい)という言い方をよく耳にします。

【接尾辞】

▼「〜コ」

名詞のあとに「〜コ」を付けて、そのものへの親近感を表す。

例) オジャッコ ノマイン (お茶を飲んでください)
カネッコ ハタイデ (お金をはたいて)

- ◆以上のほか、パンフレット『支援者のための気仙沼方言入門』にも、特徴的な単語を含めて気仙沼市方言の特色を解説しておきましたので、参考にしてください。この Web サイトの次のページでご覧になれます。

<http://www.sinsaihougen.jp/>大震災と方言活動情報/支援者の方へ/

【参考文献】

- 加藤正信（1969）「東北方言概論」『言語生活』210
- 加藤正信（1992）「宮城県方言」平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野眞・久野マリ子・杉村孝夫編『現代日本語方言大辞典 第1巻』明治書院
- 小林隆編（2012）『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学国語学研究室
- 佐藤亨（1982）「宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会
- 菅原孝雄（2006）『けせんぬま方言アラカルト 増補改訂版』三陸新報社
- 東北大学方言研究センター（2012）『方言を救う、方言で救うー3.11被災地からの提言ー』ひつじ書房